

私が立命館に参りましてから、はや、五年の月日がたとうとしていきます。赴任当時、大学紛争の余燼さめやらず、文学部教員研究室がたたきこわれ、書物や文献がひきちぎられ燃やされるのを目の当りにしなければなりませんでしたが、そのような荒唐した状況のなかでも、日本文学専攻では、定例の談話会を開催する努力が続けられていました。集る人々の数は、決して多くはありませんでしたが、直撃な研究への熱意はいささかも損われてはおりませんでした。私は、その席で、姜斗興君から万葉仮名の史説起源説を聞いた折の、新鮮な驚きを、いまだに忘れることができません。君の業績については、その後、立命館文学にまとめられ、学会の注視を浴びるにいたっておりますので、専門外の私が言及するまでも

ないでありましょう。ともあれ、私は、日本文学専攻を築きあげてこられた、先蹤の先生方と卒業生の諸士に、敬意と信愛との念を新にするにいたしました。私は、談話会故に、立命館と離れがたく結び合わされたのであります。

談話会のことども

鷹津義彦

で見ましても、学問は対話に負うところが少くないと思われまふ。対話により、自己の考えが確かめられるというばかりでなく、思いもかけぬ示唆により、これまで突き当たっていた壁の向うが見えてくるということが、しばしばあるものです。もちろん、四囲が見えて

くるためには、見るための努力と蓄積とが必要なことはいうまでもありませんが、しかもなお、他との対話が、必須な前提条件となることが多いのであります。これからも研究を続けていこうとする卒業生はいうまでもなく、在学中の諸君も、すすんで談話会に参加されるよう期待する所以でもあります。

なお、近時の談話会では、二次会の酒がつきものになりつつあるとの批判を耳にしますが、その責めは、あげて、新参の私どもにあるかと存じます。しかし、酒席といえども、その話題は、談話会の内容の深化と飛躍とに限られていますので、これまた、上戸の方々の自由参加をお待ちしている次第であります。